

研究ノート

不潔不衛生・公然たる裸体・不躰な好奇心と礼節・
勤勉・無償の善意が共存する明治11年の日本の「奥地」
——イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む

藤 田 秀 樹

研究ノート

不潔不衛生・公然たる裸体・不躰な好奇心と礼節・勤勉・無償の善意が共存する明治11年の日本の「奥地」——イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む

藤 田 秀 樹

はじめに

幕末から明治前期にかけての日本には、開国と近代化という政治・社会・文化の地殻変動の中で数多くの外国人、特に欧米人が来日・滞日した。彼らは外交官、軍人、研究者、宣教師、そして「お雇い外国人」と呼ばれる技術者や教師などであり、それまで未知の世界であったこの国での見聞や体験を記したものを日誌、日記、紀行といった形で残している。その具体例の一部として、アメリカの海軍軍人、マシュー・カルブレイス・ペリー（Matthew Calbraith Perry）の『日本遠征日記』（*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan Performed in the Years 1852, 1853, and 1854 under the Command of Commodore M. C. Perry, U. S. N.*, 1856）、イギリスの外交官、ラザフォード・オールコック（Rutherford Alcock）の『大君の都』（*The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 1863）、スイス通商使節団の一員だった外交官、ルドルフ・リンダウ（Rudolph Lindau）の『日本周遊旅行』（*Un voyage autour du Japon*, 1864）、イギリスの日本学者、バジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）の『日本事物誌』（*Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others*, 1890）、イギリスの外交官、アーネスト・メイソン・サトウ（Ernest Mason Satow）の『一外交官の見た明治維新』（*A Diplomat in Japan: the Inner History of the Critical Years in the Evolution of Japan*, 1921）を挙げることができる。これらは言わば「他者」の目に映じた当時の日本の記録・記述であり、日本人自身によるそれとは異なる着眼や洞察に彩られている点で興味深いものとなっている。

本稿では、そのような欧米人による日本観察記のひとつを取り上げてみたい。1878（明治11）年の5月下旬に、ひとりのイギリス人女性がシティ・オブ・トキオ（City of Tokio）という船に乗って横浜に到着した。イザベラ・バード（Isabella Bird）という名のこの女性は、6月初旬に東京を発って陸路北上し、青森から蝦夷（北海道）に渡って最終的な目的地である日高地方最大のアイヌ集落、^{びらとり}平取に至る3か月に及ぶ旅を敢行することになる。この旅における見聞や体験をまとめたものが『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*, 1911）であり、本稿で取り上げるテキストである。なお、使用したのはニューヨーク州ロングアイランドのドーヴァー（Dover）社版のものだ。これは1880年に出版された原著（*Unbeaten Tracks in Japan*:

An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikko and Ise) をバード自身が編み直し、1911 年にロンドンのジョン・マレー (John Murray) 社から出版された簡略本の再版であることを最初にお断りしておきたい¹⁾。

バードは先に挙げたような来日・滞日欧米人たちの社会的ステータスとは無縁であった。言わば彼女は、何ら公的な肩書を持たない一介の旅行者にすぎない。しかし『日本奥地紀行』で活写されている彼女の旅は、単なる観光、物見遊山とは程遠いものだ。そもそも彼女は、来日以前にも世界各地を旅している。本書で言及されているものだけでも、ライン川 (110)、アルプスのブリューニッヒ (Brunig) 峠 (189)、北米のロッキー山脈 (189) 及びテキサス (217)、ハワイ (222, 291)、南スペイン (305)、中国 (321) と極めて多岐に渡る。さらに彼女は、これまで何度か「未開の民族 (savage peoples)」に囲まれて過ごしたことがある、とも述べている (107)。かようにバードは、未開とされる土地も厭うことなく世界の各地を旅行する筋金入りのグローブ・トロッター (globe-trotter) だったようだ。そして彼女の日本の「奥地」の旅も、およそ名所旧跡巡りの類ではなかった。先述のように「未開の民族」に言及しているのは福島県と新潟県の県境付近の村々についての記述においてであり、そこの住民たちが不潔不衛生さで「未開人も同然 (little better than savages)」に見えたからだ (107)。バードが旅先でしばしば足を踏み入れたのはこのような場所だった。

この紀行のタイトルには “unbeaten tracks” という語句が用いられているが、*Webster's Third New International Dictionary* によれば、“unbeaten” とは “untrod”、つまり「人が足を踏み入れたことのない」の意であり、“track” は “a rough path or road, usually one that has not been built but that has been made by people walking there”、つまりきちんと建設された道ではなく、人が歩いて踏みならしたでこぼこの粗末な道を表す。もちろんここでの “unbeaten” は「外国人が足を踏み入れたことのない」ということであろうが、バードが主に馬に乗って進んだ道はまさに “track” と形容するほかない、そしてひとたび強い雨が降ればたちまち沼地と化すような代物が少なくなかった。さらに彼女が発発前にある行政部局に旅行日程表を提出したところ、彼女が辿りたいと思っていた 140 マイルに及ぶルートについて「情報が不十分 (insufficient information)」という理由で、記述なしで返却された。国の行政当局ですら十全に把握しきれていない地域があったということか。このことを知った駐日イギリス公使のハリー・パークス (Harry Parks) は彼女に、「旅をしながら情報を得なくてはならないことになるが、それで一層面白いことになるでしょう！ (You will have to get your information as you go along, and that will be all the more interesting!)」と語ったそうだと (20)。言わば彼女の旅は、「出た所勝負」のような側面もあったのである。イギリス領事代理が評したように、彼女の旅の計画は「少々野心的すぎる (rather too ambitious)」ものだった (7)。

バードの来日の数年前までは、外国人が日本国内を旅行することは基本的に認められてい

なかった。1858（安政5）年に日米修好通商条約を皮切りにオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの間で順次締結された安政の五か国条約においては外国人が自由に移動できる遊歩区域が設定され、それは概ね、箱館（函館）、神奈川（横浜）、兵庫（神戸）、新潟、長崎の5つの開港場、及び江戸（東京）、大坂（大阪）のふたつの開市場から10里四方であった。しかし1874（明治7）年に制定された外国人内地旅行允准条例によって、植物・動物・鉱物調査のためとか、疫病により浴泉や転地を要するなどの条件付きで遊歩区域を越えた内地（the interior）の旅行が認められるようになった（大山 204-206）。バードは『日本奥地紀行』の中で、彼女が手にした旅行免状（passport）は「療養、植物学研究、または科学的調査（health, botanical research, or scientific investigation）」を理由として申請しなくてはならないものであることに言及している（33）。さらに栃木県の五十里という村で、彼女の日本人通訳が村人たちの前で旅行免状に書かれていることを読み上げた際に、彼女について誇張して語れば自分の格も上がると考えて、この御方は「学者」なのである、と述べたというエピソードが紹介されている（91）。バードは来日の4年前に制定された条例の恩恵を大いに享受したということなのだろう。また彼女はこの紀行の序文の冒頭で、健康回復のため母国を離れることを勧められ、「独りで健康を求める者の楽しみと回復に大いに資するような、真新しく次々と繰り出される興味深いものを格別豊かに蔵しているに違いないこと（the certainty that it [Japan] possessed, in an especial degree, those sources of novel and sustained interest which conduce so essentially to the enjoyment and restoration of a solitary health-seeker）」に惹きつけられて日本を訪れることに決めた、と述べていることから（ix）、「療養」も旅行の目的とされていたのかもしれない²⁾。もっとも実際には、彼女の旅は、少なくとも身体的には療養や保養とは程遠いものであったが。

ところで、バードは確かに「学者」ではないが、『日本奥地紀行』で目を引くのは、植物に関するバードの博識ぶりである。初めて訪れた異国の環境でありながら個々の植物を識別し、そのいくつかについてはラテン語の学名——例えばダイコンを表す *Raphanus sativus* (44)、マタタビを表す *Actinidia polygama* (97)、イチヨウを表す *Salisburia adiantifolia* (313) ——まで挙げてみせる。植物だけではない。「沖積層の (alluvial)」(110) や「石灰華 (tufa)」(290) といった用語の使用に見られるように、地質や鉱物にも精通していることを窺わせる記述が散見される。これらの該博な知識や観察眼は、まるで彼女が博物学者であるかのような印象を与える。内地旅行許可の条件をバードが律儀に履行しているとも考えられうるが、彼女の「学者」を思わせるような観察・調査はこれだけにとどまらない。平取ではアイヌたちから彼らの宗教と習俗に関する聞き取りを長時間に渡って行い、また300のアイヌ語の単語を採集し、それらを発音通りに綴っている（241）。有珠湾岸でも同じ聞き取りと採集を行って、語の初めの ch という音の前の ts という舌打ち音がこの地域のアイヌの発音の強い特徴であると記述している（304）。さらにやはり平取では、アイヌの頭蓋の円周などの人体計測により、彼らの民族的類

型を同定しようとしている(257-258)。これらは文化人類学者、言語学者、自然人類学者を思わせるような知的営みとも言える。

またバードは、千把扱きと思われる農具を観察し(44)、流れ灌頂という民俗世界の供養の様式について(129-130)、さらに訪れた町で行われていた葬儀や婚礼に参列してそれらに見られる儀礼や習俗について詳述している(148-151; 166-169)。そして、外国人が訪れたことのない僻遠の村々で、そこの住民たちの生業や暮らしぶりを丹念に記述する。かように『日本奥地紀行』は、民俗学者の手になる明治前期の北関東や東北などの地域の名もない人々の民俗誌、生活誌の様相すら呈した書となっている。バードの旺盛な知的探求心と行動力は、一介の旅行者とは一線を画するものであろう。

バードが旅した時代の日本も興味深い。「御一新」から10年余りが経っているものの、彼女の来日の前年には西南戦争という反政府内戦があり、来日直前の1878年5月14日には内務卿(内務省長官)で「維新三傑」のひとりである大久保利通が暗殺されるという事件が起きている。バードは秋田県のある村で、総理大臣が暗殺されたという荒唐無稽な噂が流れているのを知り、「農民たちは過去10年の様々な変化や、最近の内務卿の暗殺のあと、現体制を信用していない(the peasantry lack confidence on the existing order of things after the changes of the last ten years, and the recent assassination of the Home Minister)」と書いている(179)。着実に近代化への歩みを進めつつも、10年ほど前の根底的な政治的、社会的変革の余燼がまだくすぶっているような時勢だったと言える。また特に地方では、下層階級の男たちがまだ髷を結い(34-35)、既婚女性が歯を黒く染め眉を剃るといった(74, 105)、江戸時代の遺風が根強く残っていた。内田樹は明治を、「近代と近代以前のいわば『汽水域』のような時代」と表現している(10)。前近代と近代の混淆、相克は特に明治前期において顕著であっただろう。

このような時代にバードは日本を、しかも主に日本の辺境を旅したのである。既に述べたように、ある僻遠の村々では住民の「未開人同然」のありさまに嫌悪を覚える一方で、後述することになるが、別の地域の農村地帯を「アジアのアルカディア」と称えている。さらにこれも後述するが、バードは日本の「近代化」に対してどこか複雑な感情を抱いていたようだ。

いずれにせよ、外国人が足を踏み入れたことのない明治前期の日本の「奥地」とそこに埋もれるように暮らす人々の日常の暮らしや営みについての、ひとりのイギリス人女性という「他者」の目を通しての記録という点だけにおいても、『日本奥地紀行』は興趣の尽きない書である。目の当たりにしたことに対する彼女の驚き、当惑、称賛などの様々な感情やコメントは、当時の日本の社会や文化について考える上での新たな気づきや視座を与えてくれるものになるかもしれない。以上のようなことを念頭に置きつつ、本稿では蝦夷に渡るまでの東京→埼玉→栃木→福島→新潟→山形→秋田→青森の行程を射程として、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』というテキストを読み解いていくことにする。

1. 交錯する近代と前近代

先に、明治は近代と前近代が混じり合う「汽水域」のような時代、という説を紹介したが、『日本奥地紀行』にはそれを裏付けるような観察が散見される。バードは来日早々にそのような時代相を実感する。彼女は1872（明治5）年に開業した日本最初の鉄道を利用して横浜から新橋に赴くが、新橋駅では汽車から吐き出された200人の日本人乗客の400の下駄（clog）のカタカタという音が響き渡り、それは彼女にとって「初めて聞く音（a new sound）」だった（12）。鉄道という当時としては最先端の近代的利器と、それにはややそぐわないが、にぎやかな音を立てて自己主張しているかのような乗客たちの伝統的な履物という組み合わせが面白い。

ちなみにバードは、日本で耳にした様々な音に強い印象を受けている。粕壁（春日部）の宿で一夜を過ごしたときには、隣室の客の読経と三味線の音色、太鼓の音、盲目のマッサージ師（blind shampooer）の笛の音、火災警戒の夜回りが打ち鳴らす拍子木の音を耳にして、それらは「私が何ひとつ知らない暮らしの一面（a life of which I knew nothing）」であり、「その面妖さは、魅力的というよりも不安や恐怖をもたらすものだった（the mystery was more alarming than attractive）」と記している（41）。下駄の音と同様に、これらの音も江戸時代から連綿と続く人々の暮らしと営みの音と言えよう。

バードは旅に出るまでの日々を過ごした東京を、「古いもの」と「新しいもの」が相克する都市と捉えている。彼女は浅草見物についてかなり多くの記述を割いており、浅草寺とおぼしき名利をはじめとしたいくつかの寺の境内や本堂などで目の当たりにした光景を詳述している。それは彼女にとって、日本人の古来の信仰や宗教的習俗を映し出すものであろう。一方で彼女は、それとは対照的な光景にも、つまりロンドンで見かけるような郵便車、西洋風の制服を着て西洋風の鞍にまたがった騎兵隊、英国製馬具をつけた2頭の馬に引かせた英国製馬車、さらに「帝」、軍人、官吏、警官、そして「若い日本（young Japan）」を体現したいと思っている若い男たちの洋装にも言及している。そして、「この大都市では、古いものと新しいものが対照を成し、互いに押し合いへし合いしている（the old and the new in this great city contrast with and jostle each other）」と述べている（30）。古いものと新しいものがせめぎ合っているというのである。なおこの浅草見物には先に挙げた数々の日本観察記のうちのひとつの著者であるチェンバレンも同行しており、あとで詳しく述べることになるが、彼は1890年初版の先述の著書の中で、「古い日本（old Japan）」が死んで、見た目や目指すものが前任者とは全く異なる「若い日本」の治世になっている、と語っている（6）。

そして旅先の「奥地」でも、バードは近代と前近代の奇妙な混在を目の当たりにすることになる。山形県を移動中の記述の中に興味深い一節がある。それまで悪路に悩まされていたバードは、東置賜郡の津久茂で、電信柱が立ち並び両側に側溝がある手入れの行き届いた広々とした道路に出る。それは「突然新しい世界になったようだった（It was a new world at once.）」と

感じさせるものであり、さらに彼女は次のように続ける。

そのような文明化した環境において、ふたり、または4人の茶色い肌の男たち、あるいは多くの場合そうなのだが服を着ていない男と上半身裸のその妻が、荷車を引いているのを目にするのは奇妙なものだった (In such civilized circumstances it was curious to see two or four brown skinned men pulling the carts, and quite often a man and his wife—the man unclothed, and the woman unclothed to her waist—doing the same.)。また、上には電線があるのに、下には日除け帽（笠）と団扇だけを身につけた男たちがいるのは不調和なものに思えた (And it struck me as incongruous to see telegraph wires above, and below, men whose only clothing consisted of a sun-hat and fan)。一方で、本と筆記用小型黒板を持った子供たちは下校途中で、学んだ課業を暗唱していた (while children with books and slates were returning from school, conning their lessons)。(134 強調は引用者)

ここでは、電信柱と電線に具現される「新しい世界」と裸で肉体労働をする人々が、不調和ですぐわなないものとして対置されている。明らかに前者は文明化＝近代化した世界、一方後者はそれ以前の世界に属するものと位置づけられている。そしてそれらが混じり合っひとつの、しかもいかにも不調和な情景を構成していたことが、バードにとってはとても印象的だったようだ。最後につけ加えられる下校途中の子供たちの姿は、1872（明治5）年の「学制」の発布によりスタートした近代国民教育制度が東北地方の農村地帯にもすっかり定着していることを印象づけるものだ。バードの目には、この子供たちが文明化＝近代化の申し子として、裸で働く大人たちの次代を担う存在となるであろうと映ったのかもしれない。

ところで、バードが手入れの行き届いた広々とした道路に感嘆したのは、既述のようにそれまでさんざん悪路に悩まされたからであった。劣悪な道路事情は彼女の旅の悩みのひとつであり、特に福島県がひどかったようだ。会津地方の車峠から西へ向かう道は彼女が経験した中で「最も苛酷なもののひとつ」で、「全ての近代的な考え方を無視して、その道は当てずっぽうに言ってみる気にもなれないほどの傾斜度で山を真っ直ぐに上って下る (In defiance of all modern ideas, it goes straight up and straight down hill, at a gradient that I should be afraid to hazard a guess at)」という代物であり、しかも彼女が歩いたときには「完全な沼地 (perfect quagmire)」状態になっていた (106 強調は引用者)。また新潟県では関から川口まで人力車に乗って移動したが、石に乗り上げたり沼地のような所にはまったりして、ついには降りて歩くはめになり、車夫たちも空の人力車を引くことすらできなくなって、しばしばそれを担ぎ上げて運ばざるをえなくなった (122)。バードは次のように述べている。

良い道路は、まさに日本が最も緊急に必要としているものだ (Good roads are really the most pressing need of Japan.)。日本政府が内地での物資の輸送のための道路の建設のような利益をもたらす支出によって国を富ますならば、イギリスで装甲艦を購入したり、金のかかる西洋流の虚勢を示す振舞いに耽ることで国を貧しくするよりもずっと有益であろう (It would be far better if the Government were to enrich the country by such a remunerative outlay as making passable roads for the transport of goods through the interior, than to impoverish it by buying ironclads in England, and indulging in expensive western vanities.)。(102)

ちなみに陸上輸送においては、当時も近世と同様に、貨物は基本的に馬子が引く荷馬の背で運ばれていたようであり、バードの荷物もほとんどの場合そのようにして運ばれた。彼女は利用することがなかったが、荷担ぎの人足によって運ばれることもあった。彼女は山形県では、馬の代わりに牛の背に載せて荷物を運んだ (128)。また、近代以前の日本では馬は蹄鉄を打ってはおらず人と同じように草鞋を履いていたのだが (金田 226)、バードが旅した時代にもこの習俗はまだ残っていた (88, 97)。

かように明治10年代初めの内地の道とそれに関わる営みは前近代の残滓を濃厚なまでにとどめていたが、その一方で近代化への動きも着実に進行しており、バードの旅はそれに支えられてもいた。「陸運会社」と呼ばれる陸上輸送会社があり、定額料金で荷馬と人足による旅行者と貨物の輸送を担っていた。バードは行く先々に支店があり「見事に組織化されていて (admirably organized)」、「きちんと仕事をして信頼の置ける (efficient and reliable)」この会社を利用した (79)。明治新政府は「封建的な道路政策を一洗して、関所・宿駅制度を廃して交通の自由化をはかった」のであり (大久保 273)、明治11年には既に、広域を網羅する近代的な運輸システムができあがっていたのである。またバードは秋田県の院内の宿で、彼女が越えてきた峠にトンネルを通せるかどうか調査するために派遣された6人のエンジニアが隣室に宿泊していた、と記している (144)。1876 (明治9) 年に山形県令 (県知事) になった三島通庸^{みちつね}は山形県の米沢と福島県の福島を隔てる栗子山を貫通する大トンネルを完成させ万世大路を開通させるという道路事業を成し遂げ (大久保 276-285)、「土木・道路県令」と呼ばれた。バードが書き留めているエピソードは、当時そのような事業が盛んに行われていたことを示唆するものと言える。当時の道も、近代と前近代が混在しせめぎ合う空間だったようだ。

ところで、ラジオやテレビはもちろんのこと、新聞ですらも普及していなかったマス・メディア不在の時代には、都市と農村の情報格差は大きかっただろうし、それにより自分たちが置かれていた時代状況との向き合い方もかなり違っていただろう。既述の栃木県五十里の住民についてのバードの記述は辛辣である。

ここは昨日いた所と比べるとかなりきれいだが、ここの住民たちは愚鈍で何にも関心がないように見える (This is a much neater place than the last, but the people look stupid and apathetic)。そして、「大名」と封建「体制」を廃し、「エタ」を市民にして、西洋文明に追いつこうと帝国を前へと急がせる人々のことを彼らは一体どう思っているのだろうか (and I wonder what they think of the men who have abolished the *daimiyo* and the feudal *regime*, have raised the *eta* to citizenship, and are hurrying the empire forward on the tracks of western civilization!) ! (91)

「御一新」もそれに続く西洋化への闇雲な傾倒も我関せずで、もしかするとそれらのことを十分に把握すらしていないようにも見える農民たちにあきれているような筆致である。都市から遠く離れた当時の農村では、多くの人々が近世からあまり変わっていない暮らしや営み、社会意識とともに生きていたのであろう。

近代と前近代の混在、せめぎ合いという点で同様に興味深いのが、バードの通訳を務めた伊藤という人物だ。彼がいなければバードは旅を成し遂げられなかっただろうと思えるほど、彼女の旅にとっては重要な存在である。『日本奥地紀行』を読む限りでは、18歳の青年であること以外、どのような出自や社会的バックグラウンドを持つのかは不明だ。ただ採用のための面接では、アメリカ公使館で暮らしたことや大阪の鉄道で働いていたことがあり、植物の収集家のマリーズ (Maries) 氏とともに東側のルートを通して北日本を、さらには蝦夷を旅したことがある、と語っている (17)。実は、バードがのちに蝦夷に渡ってから、彼はこのマリーズと契約関係にある被用者であるにもかかわらず、それを隠して、より高い賃金を提示したバードのもとで働くようになったことが判明する (214)。

伊藤は、『日本奥地紀行』を原作としている佐々大河の漫画、『ふしぎの国のバード』ではクールな好男子として描かれているが、実際はバードによれば、身長4フィート10インチ (約147センチ) とかなり小柄でがに股であり、「丸くてとても不細工な顔 (a round and singularly plain face)」で「重く垂れさがった瞼は普通の日本人の容姿の特異性をほとんど戯画化したようであり (the heavy droop of his eyelids almost caricatures the usual Japanese peculiarity)」、 「私が見たことのあるうちで最も愚鈍に見える日本人 (the most stupid-looking Japanese that I have seen)」という面相だった (17)。しかし英語力に関しては、旅の初期の段階で既に「多くの通訳を職業とする人々よりもずっと上手に英語を話す」 (87) とバードが評するほど卓越しており、旅の間も彼はその能力に磨きをかけるため、バードが使った語で自分が十分には理解できないものについては毎日手帳に書き留め、その日の晩にバードに聞き質して意味と綴りをまた手帳に書き留めた (87)。バードは久保田 (秋田市) 滞在中には、「修練と熱心な学びにより、彼は今では私が会ったことのあるどの官選の通訳よりも上手に [英語を] 話す (by practice

and industrious study he now speaks better than any official interpreter that I have seen)」と記している(161)。

蛇足ながら、「英語学習」をめぐるバードと伊藤のやりとりが実に面白い。バードによれば、「彼は最も上質の英語を話したいと強く思っており、ある語が俗語的、または品がないということになれば、それを使用禁止にしてしまう (He is anxious to speak the very best English and to say that a word is slangy or common interdicts its use)」(163)。ある日バードが「今日は何てすばらしい天気なんでしょう！ (What a beautiful day this is!)」と言うと、伊藤はすぐに手帳を手にして、それは「どえらくいい天気 (a devilish fine day)」よりも良い英語表現なのか、と尋ね、「どえらく」は品がない、と言われると、それ以降しきりに“beautiful”を使うようになった(163 強調は引用者)。また彼は当初、男性を表すのに“fellow”(「やつ」とか「野郎」というニュアンスもある)という語を使っていたが、病院の主任医師を指すのにもこの語を使ったので、バードから、その語は少し俗語的で少なくとも口語的(colloquial)だ、と言われると使うのを止めた。アメリカ公使館にいたことがあったため、「アメリカ英語の卑俗でくだけた表現を聞き覚えてしまったのだ」(87)。ところがある日、目がひどく爛れた少年を見てバードが思わず「かわいそうな子！ (Poor little fellow!)」と叫ぶと、その日の晩に伊藤は、「あなたはあの少年をフェローと呼びました。それは良くない語だと私は思っていました」と言ったそう(163)。

英語を熱心に学び通訳を務めるということから開明的な進取主義者を連想するが、バードによれば、意外にも伊藤は外国人嫌いの「愛国者」だった。

彼は熱情的な日本主義者であり、その愛国心には自己愛というものが持つ全ての弱さと強さがあり、そして彼は外国のものは全て劣っていると思っている (He is intensely Japanese, his patriotism has all the weakness and strength of personal vanity, and he thinks everything inferior that is foreign.)。私たち欧米人の作法や物の見方や食べ方は、彼にとってはとても不快なものようだ (Our manners, eyes, and modes of eating appear odious to him.)。彼はイギリス人のひどい振舞いのエピソードを吹聴するのを喜びとしており、具体的には、彼らは「道で出会った誰彼に『オハイオ(おはよう)』と怒鳴り」、茶屋の若い女性たちを怯えさせ、雇った人足たちを蹴とばしたり平手打ちを食らわせたりし、泥だらけのブーツのまま白い畳の上にならずかあがり、しつけの悪い色情狂のように振舞い、ごく普通の田園地帯であからさまな憎悪を引き起こすようなことをし、自分自身と自分の国を蔑みと嘲りの的にしている連中だ、というのである (He delights in retailing stories of the bad manners of Englishmen, describes them as “roaring out ohio to every one on the road,” frightening the tea-house nymphs, kicking or slapping their coolies, stamping over white mats in muddy boots, acting generally like ill-bred Satyrs, exciting an ill-concealed hatred in simple country districts, and bringing themselves

and their country into contempt and ridicule.)。(87 強調は引用者)。

さらにバードは、「彼は外国人を嫌っており」(161)、「外国人によって成された発見を日本人が利用するのは正しいことであり、外国人は日本から学ぶことが彼らの発見と同じくらい多くあり、日本は手にする価値のあるものを全て手に入れ、キリスト教という夢魔のように心労をもたらすものを拒絶するがゆえに、競争では外国人を追い越すだろうと考えている (He thinks that Japan is right in availing herself of the discoveries made by foreigners, that they have as much to learn from her, and that she will outstrip them in the race, because she takes all that is worth having, and rejects the incubus of Christianity.)」のであって (162)、「私が思うに、愛国心は彼の最も強固な感情である (Patriotism is, I think, his strongest feeling)」(162) と記している。

しかし伊藤は本当に外国人、具体的には欧米人が嫌いで、欧米のものは全て日本のものより劣っていると信じていたのだろうか。ここで彼のいくつかの言動に注目したい。栃木県の藤原という村では家々も人の体も衣服も虫だらけというかなり不潔な状態で、泊まった宿でもバードと伊藤は蚤のあまりの多さに眠れないほどだった。そして伊藤はバードに、「外国人にこのような場所を見られて恥ずかしい ([I'm] ashamed for a foreigner to see such a place)」と語ったという (86-87)。また山形県の黒沢という村で、バードたちは泥酔して千鳥足で歩くひとりの女性を目にした。すると伊藤は顔を両手で覆って石の上に座り込み、「あなたにあんなものを見られてとても恥ずかしい! (I'm so ashamed for you to see such things!)」と嘆いた (125)。どちらも「欧米人に見られて恥ずかしい」と感じているのだが、それは彼が「欧米人のまなざし」を内面化しているからなのではあるまいか。欧米人の目に前近代的、後進的で見苦しいと映るであろうものを屈辱的と感じてしまっているのだ。このことに関連して興味深いのは、伊藤についての次のような記述である。

私は彼の鼻持ちならない黒の中折れ帽を脱らせて、私と同じ洗面器のような形の帽子（笠の一種であろう）を被らせることができた (I succeeded in getting Ito out of his obnoxious black wide-awake into a basin-shaped hat like mine)。というのは、私が思うに彼は不細工なのに、かなり自己陶酔的で、歯を白くして、鏡の前で入念に顔に白粉をつけ、日焼けをひどく恐れるのだ (for, ugly as I think him, he has a large share of personal vanity, whitens his teeth, and powders his face carefully before a mirror, and is in great dread of sunburn.)。彼は手にも白粉をつけ爪を磨き、外出するときには必ず手袋をする (He powders his hands too, and polishes his nails, and never goes out without gloves.)。(78 強調は引用者)。

つまり伊藤は、先述のように「普通の日本人の容姿の特異性をほとんど戯画化したような」

風采なのに、欧米人が被る帽子を被りたがり——バードの目にはひどく不釣り合いで滑稽に映ったであろう——肌を白く見せることに執着しているのだ。彼の欧米・欧米人嫌悪はかなり複雑な様相を持つもののようである。それは欧米に対する対抗意識の反映であるだけでなく、その底に憧憬の念すら潜在させているかもしれないのだ。そして彼の「愛国心」も、日本の近代化＝欧米化と対立するものではないようだ。「外国人に見られて恥ずかしい」農村部の状況は、忌まわしい前近代の残滓なのであろう。そして伊藤は「奥地」を旅する間、都会育ち (town-bred) のような風をひけらかした (91, 163)。彼は必死に前近代とは一線を画そうとしていたのであろう。

明治10年代の初めには、わずか10年ほど前の政治的、社会的地殻変動の余震がいまだ散発し、東京ですら近代と前近代が混在しせめぎ合い、農村地帯は前近代・近世の様相を濃厚にとどめていた。そして、英語に精通することにより欧米と日本を媒介・架橋する役割を担う青年が、欧米への対抗意識と憧憬の念が緋い交ぜになり、農村部のありさまを「国辱」と感じるような屈折した「愛国心」を抱く。バードはこのような時代に日本の「奥地」を旅したのである。

2. 不潔不衛生と公然たる裸体

旅の間、バードは様々なことに悩まされたが、その主要なもののひとつが、特に農村部における不潔不衛生ぶりであった。彼女が東京から青森まで旅したのは6月初旬から8月初旬にかけて、つまり夏であって、宿では無数の蚤や蚊に苛まれることになった。旅の最初の宿泊地である粕壁の宿で早くも、「蚤と蚊という厄介物は、どうにもならない災いになりそうだ (the torments of fleas and mosquitoes are, I fear, irremediable evils)」と実感している。さらに、先に言及した栃木県藤原の宿は次のようなありさまだった。

暗くなると宿の私の部屋では、ゴキブリと蜘蛛とワラジムシがカーニバルを開き、宿の屋内で飼われている馬たちは何匹ものアブを呼び寄せた (Beetles, spiders, and woodlice held a carnival in my room after dark, and the presence of horses in the same house brought a number of horseflies.)。私は簡易ベッドに除虫粉を撒いたが、毛布を1分間床の上に置いただけなのに、蚤のせいで眠ることができなくなった (I sprinkled my stretcher with insect powder, but my blanket had been on the floor for one minute, and fleas rendered sleep impossible.)。 (86)

やはり前出の栃木県五十里の宿では、蚤がいるためにその寝具を使う気にはなれず (91)、次に立ち寄った横川という所では、茶屋にいる無数の蚤を避けるために通りで昼食を摂った (92)。バードは旅に発つ前に東京で日本在住の外国人たちから様々なアドバイスを受けたが、彼らの間で意見が一致していたのは、蚤が夏の日本での旅の災いの種になるということだった

(18)。実際、それが的中するはめになったのである。さらに山形県では、スズメバチ、アブ、馬蟻 (horse ant) に刺されたところが炎症を起こすという災難にも見舞われている (140)。

当然、彼女が訪れた村々の住民たちの家の中や体も虫だらけであった。藤原では「住民の体や衣服や家は虫だらけ (The persons, clothing, and houses are alive with vermin)」であり (86)、福島県南会津郡の川島という村では、「家の畳はまずまずの見てくれだが、その下には虫がうじゃうじゃいて、ほこりや有機物などの容れ物のようで (The *tatami*, beneath a tolerably fair exterior, swarm with insect life, and are receptacles of dust, organic matters, etc.)」、「住民たち、特に子供たちの体は害虫にたかられ、皮膚の爛れをたっぷりもたらす原因のひとつがそれらの虫による刺激だ (The persons of the people, especially of the children, are infested with vermin, and one fruitful source of skin sores is the irritation arising from this cause)」というありさまであった (94-95)。しかし彼らにとっては、バードとは違ってそのような状態がごく普通の「日常」だったのであろう。民俗学者の宮本常一は、バードが旅の間ずっと虫に悩まされたことに触れつつ、次のように述べている。「しかし日本の紀行文の中には〔虫に手を焼いたという記述は〕でてこない。それが当たり前だったからで、当たり前でない人から見た文章の中から当時の日本の生活環境がよくわかって興味深いのです」(宮本 138)。

「未踏の道」を辿る中でバードが目当たりにした人々の体や衣服や住居の不潔さは、彼女に強烈な印象を与えたようだ。彼女は川島の住民たちの暮らしについて次のように書いている。

ここの住民たちは肌着を身につけず、衣服もめったに洗濯せず、ほつれて着られなくならない限り、昼も夜も同じものを着続ける (These people wear no linen, and their clothes, which are seldom washed, are constantly worn, night and day, as long as they will hold together.)。夜になると、そもそも炭火とタバコの煙で空気が悪くなっているのに家を最大限密閉状態にして、ひと部屋だけの寝室に数人が鰯詰めになり、日中は閉め切った押入れに入れられていて年末から翌年の年末までの間めったに洗濯しない綿入れの布団に、汚れた衣服のままくるまるのだ (they seal up their houses as hermetically as they can at night, and herd together in numbers in one sleeping-room, with its atmosphere vitiated, to begin with, by charcoal and tobacco fumes, huddled up in their dirty garments in wadded quilts, which are kept during the day in close cupboards, and are seldom washed from one year's end to another.)。(中略) 髪には油やバンドリン (頭髮用香油) が塗り込まれているが、その手入れをするのはこのあたりの地域では多くの場合、週に一度かそれ以下で、その悲惨な結果に関して詳述する必要はないだろうし、それ以外の多くのことは想像に任せることにする (The hair, which is loaded with oil and bandoline, is dressed once a week, or less often in these districts, and it is unnecessary to enter into any details regarding the distressing results, and much besides may be left to the imagination.)。

(94-95)

前出の宮本は、衣服をめったに洗濯しないのは、それをすると傷んで早く破れ、着物の補給がつかなくなるからだ、と指摘している(87)。衣類はまだ貴重品で、できるだけ長持ちさせようとしたのであろう。なおバードは、この地域の住居内に蔓延する様々な悪臭にも言及しているが、そのうちのひとつに「欠陥のある住居内の設備が発する瘴気 (the miasmata produced by defective domestic arrangements)」がある(95)。かなりぼかした記述だが、この「欠陥のある設備」はおそらく便所のことであろう。ちなみにフランス人の実業家で1876(明治9)年来日したエミール・ギメ(Emile Guimet)も、日本家屋特有の便所の耐え難い臭気に繰り返し言及している(191, 202, 265)。

会津地方から新潟県へと旅を進めるにつれて、バードの筆致は苛烈なものになる。

私が思うに、その地域の村々の汚さは、宝沢(福島県耶麻郡の「宝坂」のことであろう)と(新潟県東蒲原郡の)栄山において、そのどん底に達したに相違ない(The villages of that district must, I think, have reached the lowest abyss of filthiness in Hozawa and Saikaiyama.)。家禽、犬、馬、そして人間たちが燃やした薪の煙で黒ずんだ小屋のような家に群がり、肥やしの山から滲み出たものが井戸に流れ込んでいた(Fowls, dogs, horses, and people herded together in sheds black with wood smoke, and manure heaps drained into the wells.)。年少の男の子は皆、衣服を全く身につけていなかった(No young boy wore any clothing.)。男たちのほとんどは「マロ(ふんどし)」しか身につけておらず、女たちは上半身裸で、身につけているものはとても汚れており、惰性のみで何とかほつれずにもっているような代物だった(Few of the men wore anything but the *maro*, the women were unclothed to their waists, and such clothing as they had was very dirty, and held together by mere force of habit.)。大人たちは炎症を起こした虫刺されだらけ、子供たちは皮膚病だらけだった(The adults were covered with inflamed bites of insects, and the children with skin-disease.)。彼らの家は汚く、彼らがしゃがんだりうつ伏せに横になっていると、未開人同然に見えた(Their houses were dirty, and, as they squatted on their heels, or lay face downwards, they looked little better than savages.)。彼らの外見、彼らの日常の営みの優雅さの欠如は全く不快極まるもので、彼らは後者の点で、私がこれまでともに過ごしたことのあつくつかの未開の民族とは明らかに違っており、しかもかなり見劣りする(Their appearance and the want of delicacy of their habits are simply abominable, and in the latter respect they contrast to great disadvantage with several savage peoples that I have been among.)。(106-107 強調は引用者)

福島と新潟の県境の両側にあるふたつの村の住民たちは「未開人同然」、いやそれどころかバードが接したことのある他の未開民族よりもかなり劣っている、というのである。ほとんど裸の状態で腫れ上がった虫刺されや皮膚病を烙印のようにさらし、むさくるしい小屋のような家で動物たちと同居する彼らの暮らしには、剥き出しの不潔不衛生さがあるばかりで、威厳や品位や崇高さなどはかけらもない、とバードは感じたのであろう。

バードは前出の川島の住民たちの暮らしを記述したあとで、次のような注記を付している。

多くの不快感を与える細々とした事柄はやむをえず省略している (Many unpleasant details have necessarily been omitted.)。もし読者から、ここや他の箇所 で記したことについて何らかの弁明を求められることがあるなら、その弁明は、私が北日本で目にした小百姓の暮らしを、日本という国の概括的理解の一助になりうるものとして、同時に日本政府がここの住民と同じくらい文明というものが最初に必要とする要件のいくつかを欠いた大勢の人々を教化しようとして遭遇する諸問題の一部を例示することに役立つものとして、忠実に記述したいと思ったのだ、というものになるであろう (If the reader requires any apology of those which are given here and elsewhere, it must be found in my desire to give such a faithful picture of peasant life, as I saw it in Northern Japan, as may be a contribution to the general sum of knowledge of the country, and, at the same time, serve to illustrate some of the difficulties which the Government has to encounter in its endeavour to raise masses of people as deficient as these are in some of the first requirements of civilisation.)。 (95 強調は引用者)

かようにバードの目には、内地という日本の「奥地」の農村部は、未開同然、文明化以前ともいべき状態に埋もれた世界と映じたのであろう。

外国人もしばしば訪れる観光地である日光を発って、外国人にとって「未踏」の領域である内地に足を踏み入れて農村部の状況を目の当たりにしたバードは次のように記している。

私は見たままの真実を書いており、もし私の記述が、東海道や中山道、琵琶湖や箱根のことを書いた旅行者のそれと食い違っていると、どちらかが不正確ということにはならない (I write the truth as I see it, and if my accounts conflict with those of tourists who write of the Tokaido and Nakasendo, of Lake Biwa and Hakone, it does not follow that either is inaccurate.)。しかし実のところ、これは私にとって今までどの本も私に教えてくれなかった新しい日本であり、それはおとぎの国ではないのだ (But truly this is a new Japan to me, of which no books have given me any idea, and it is not fairyland.)。 (82-83 強調は引用者)

「おとぎの国」は、近世から近代にかけて欧米人が日本に対して抱いたイメージであった。少し言い回しは異なるが、チェンバレンも「古い日本は我々にとって、空気の精や妖精の住むきゃしゃで愛らしい不思議の世界だった (Old Japan was to us a delicate little wonder-world of sylphs and fairies.)」と述べている (3 強調は引用者)。このような日本観について、宮崎克己は次のように書いている。「鎖国による情報不足のため、日本はきわめて曖昧な存在になったが、一方で漆器や磁器は数多く西洋に流れて珍重された。そのため日本は長い間、美しい一端だけを覗かせた不思議の国、夢の国だった」(宮崎 3)。もちろん「おとぎの国」や「不思議の国」といったイメージは欧米が作り上げた幻想であり、渡辺京二が指摘しているように、オリエンタリズムの産物と言えよう (『逝きし世の面影』23-24)。バードが目当たりとした剥き出しの不潔不衛生は、そのような幻想を打ち砕く民衆の「生きられた現実」であったのだろう。

不潔不衛生は様々な疾病をもたらす。農村部についてのバードの記述で目に付くのは、皮膚病と眼病の多さである。特にバードが痛々しく思ったのは、頭部に疥癬や白癬、そして爛れ目を患う数多くの子供たちだった (76, 94, 125, 193)。彼女が久保田の病院の医師から聞いたところによれば、眼病の多さは、密集状態での暮らし、換気の悪さ、貧しい生活、明かりの乏しさによるものだった (158)。そしてバードは、何度か「医者」の役割を演じるようになった。川島の宿でその主人の幼い息子がひどい咳をしていたので彼女が鎮痛薬のクロロダインを与えると、咳がおさまった。このことはたちまち村中に伝わり、翌朝の5時までには皮膚病を患った子供を抱いた親たち、ほとんど視力を失った母親を連れた娘たち、痛々しい炎症を負った男たちなどが宿に押しかけた (93-94)。青森県の碓ヶ関でも眼病を患った人たちに目薬をさしてやると、住民が「診察」を求めて多くの病人を連れてくるようになったが、バードによればそれらの病気のほとんどは、石鹸や肌着を用いたり定期的に洗濯をするなどして「衣服と体を清潔に保ったならば決して生ずるはずのなかったものだった」(193)。

衣服の不潔さのみならず、「衣服の非着用」もバードを大いに当惑させるものだった。彼女は人々が公然と裸体をさらしていることに繰り返し言及している。自分が乗った船が横浜に到着して早々に、彼女は裸体の洗礼を受ける。船の乗客を埠頭まで運ぶ手漕ぎの舟が何艘もやって来るが、それらの船頭たちは胸や手足が剥き出しになるような「申し訳程度の衣服 (only an apology for clothing)」しか身に纏っていなかった (4)。旅の2日目に利根川を渡ったが、ここでは船頭も旅人も周囲の田畑で働く農民も、ほとんど、もしくは全く服を着ていなかった (43)。高温多湿の日本の夏には、特に労働をしているときには裸体の方が快適なのかもしれないが、前出の宝沢 (宝坂) と栄山についての記述でも見たように、男はふんどし (maro) だけ (もしくはそれすらもつけていない)、女は上半身裸というのが農村部で何度も目にする光景であった (83, 123, 125)。ちなみに “maro” とは、*Webster's Third New International Dictionary* によれば、ポリネシア人が身につけるツゲまたは亜麻の繊維で作られる下帯のことで、バードはハワイを

旅しているときにこの語を知ったのであろう。農村部だけでなく、バードが新潟市で夜に住宅街を歩き回ると、窓越しに家族が「この上なく体を露出させた『普段着』姿 (*deshabille of the scantiest kind*)」で火鉢の周りに座っているのが見えた (118)。なおバードは、前出の栃木県藤原についての記述の中でも裸体を「普段着 (*deshabille*)」というフランス語を使って表現している。彼女の目には、裸体がまさに「日常的な装い」と映ったのであろう。

裸体に関する面白いエピソードがある。バードは秋田県の六郷から神宮寺まで人力車で移動した。彼女が乗った人力車の年老いた車夫は衣服を何も身につけていなかったが、途中で警官に出会うと、地面に平伏して許しを乞うた。一緒に2台の人力車を引いていたふたりの若い車夫も、バードの人力車の後ろにかがみこんで大急ぎで服を着ようとした。バードの旅の6年前の1872 (明治5) 年に、裸体で出歩くことを禁じる違式註違^{いしきかい}条例が制定されていた。バードがとりなしたこともあって、警官は見逃してくれた。その警官の姿が見えなくなるや否や、若いふたりの車夫は衣服を宙に放り投げ、梶棒の中でふざけ回り甲高い笑い声をあげた (152-153)。この「文明開化」政策の一環としての裸体禁止条例は多分に欧米系の外国人の目を意識したものであろうが、それに対する民衆の姿勢は総じてこのようなものだったのではあるまいか。官憲の目の届かない所では守る気などさらさらないのである。バードが秋田県の横手に到着したときも、外国人を一目見ようと何人もの男女が丸裸で風呂から往来に飛び出してきている (147)。公然たる裸体と混浴の習慣は——バードも混浴に言及している (89, 205) ——幕末に來日した欧米人を仰天させるものだったが (渡辺『逝きし世の面影』296)、この近世の習俗は明治11年においても色濃く残っていたようだ。

3. 不躰な好奇心と礼節

不潔不衛生と同様に、いやおそらくそれ以上にバードを悩ませたのが、欧米系外国人に対する人々の不躰で遠慮会釈もない好奇心だった。粕壁の宿では「部屋の襖が頻繁に音もなく開けられ、隙間からいくつもの黒く細長い目が私をしげしげと見つめていた」のであり (6)、栃木県の栃木の宿でも「障子が穴だらけになり」、そこに「絶えず目が張り付いた」 (45)。福島県の高田では群衆がものすごい勢いで宿屋に殺到し、大人たちはバードの部屋を見下せる近隣の家の屋根に上がり、子供たちは柵の上に上がったが、彼らの重みでそれは崩れてしまった (100)。同じ会津地方の坂下^{ばんげ}では、バードを見るために2千人もの人々が集まった (101)。秋田県の湯沢でもバードを見るために数百人もの人々が押しかけ、彼女の姿を見ることができない後ろの方にいる者たちが梯子をかけて近隣の家々の屋根に上がったが、屋根のひとつが重みで潰れて50人が下の部屋に落ちてしまった。陸運会社の代理人が彼らに立ち去るよう懇願すると、彼らは「こんな見もの (*sight*) にはもうお目にかかれな^いかもしれないんだ」と言った (146 強調は引用者)。そして秋田県の神宮寺の宿では、早めに床に就いたバードは夜半に多くのささ

やき声や足音を耳にし、やがて40人もの人々が部屋の障子を外して自分を見つめているのに気づいた(153)。

バードに対する人々の好奇心には、異文化に対する素朴な関心という側面もあったようだ。新潟県の沼という村の宿の女主人は、ここの住民は外国人を一度も見たことがない、と語り、実際、大雨にもかかわらず住民たちは早朝から興奮して騒然としていた。彼らはバードが英語を話すのを聞きたがり、そこで彼女は伊藤に英語で指示をしてみせた(124)。山形県の手ノ子では、バードは陸運会社の代理人から、帳面に自分と彼女の名前を英字で書いてほしい、と頼まれた(129)。彼女は山形県の小松の宿屋の「大名」の部屋でそこに宿泊した著名人の名前が書かれたいくつかの「掛物」を見て、「私もこのような掛物にするので何か書いてほしいと頼まれたことが何度かある」と記している(132)。

ところでバードは旅の間中このように人々の好奇心にさらされ続けたが、危害を加えられるようなことは一度もなかった。彼らはただ、「無言で口をぽかんと開け、何時間も身じろぎもしないまま」見つめ続けるだけだった(146)。前出の高田では、バードが宿を出ると千人もの人々が集まっていた。彼女は次のように記している。「しかしこれらの日本人の群衆は物静かでおとなしく、詰め寄るように人に群がるといった無礼なことは決してしない(These Japanese crowds, however, are quiet and gentle, and never press rudely upon one.)」(100)。坂下では、バードが彼女を見るために集まった2千人の群衆の前で双眼鏡を取り出すと、彼らはそれをピストルと勘違いして大混乱に陥るという椿事があった。バードは伊藤に、取り出したものが何かを説明させた。集まった住民たちは「おとなしく温和な人々で、困らせたりすればとても申し訳ない気持ちになる(a gentle, harmless people, whom one would not annoy without sincere regret)」と思ったからだ(101)。続いて次のように記している。

多くのヨーロッパの国々、そして間違いなく私たち自身の国(イギリス)の一部の地域においては、外国の衣服を着て独りで旅をする女性は、実際に危険な目に遭わないとしても、無礼な振舞いや侮辱やゆすりに苛まれることになるだろう(In many European countries, and certainly in some parts of our own, a solitary lady-traveller in a foreign dress would be exposed to rudeness, insult, and extortion, if not to actual danger)。しかし私は、(日本では)無礼な言行、または疑いようのない法外な請求を一度も経験したことがないし、人々が押し寄せても無礼な振舞いは全くない(but I have not met with a simple instance of incivility or real overcharge, and there is no rudeness even about the crowding)。(101 強調は引用者)。

明治11年の日本の「奥地」では、好奇の目にさらされるものの、外国人の女性が独りで安全に旅することができたのである。実は彼女は、一度だけ罵り言葉を浴びせられたことがあっ

た。新潟県の津川では他の町や村と同様に群衆が集まったが、ひとりの子供が「外国の(foreign)」という意味の中国語と同じニュアンスの語句を彼女に浴びせたのである(108)。この子供は厳しく叱られ、警官がやって来てバードに謝罪した。大勢で集まって外国人を見つめながらも、無礼で侮辱的な振舞いをしてはならないというのが彼らの暗黙の規範であったようだ。

バードは「奥地」の人々にとって、「まれびと」のような存在だったのではあるまいか。折口信夫によれば、まれびとは、その原初の姿は古代の村々に海の彼方から時を定めて来訪し、村人の暮らしに幸をもたらして還っていく神であり、やがてそれが祝言を唱える神に扮した神人、さらには乞食や妖怪へと姿を変えていった(5-15)。バードも同じように海の彼方の「異界」より来訪し、町や村を訪ね歩く異形の「異人」——「外国人」という意味においてのみならず、社会学、文化人類学、民俗学で言うところの「外部」と密接につながる「ストレンジャー(stranger)」という意味での——であり、住民たちにとってはまれびとの面影を宿す存在だったのではないか。彼女の出現とともにたちまち大勢の人々が集まるさまは、まるで祭りのものである。言わば彼女は、鄙びた町や村の「ケ」の時空間を突然「ハレ」のそれへと変えてしまうのだ。そして祭りも、まれびとと密接に結びつくものだ。民俗学者の赤坂憲雄によれば、「祭りとは、来臨する神を迎え饗応し郑重に送り返すプロセスから成る」(84)、つまりまれびとの饗応を源流とするものなのである。バードが住民に求められて行った英語の語りや「揮毫」も、まるで彼らに対する祝言や言^{ことば}寿のように見えてくる。

バードのまれびと的な面影ということに関連して、面白い記述がある。冗談めかした語り口ではあろうが、彼女は行く先々で群衆に囲まれるという状況を、宣教中のナザレのイエスのそれと重ね合わせている。既述のように福島県の高田では彼女を見物するために大群衆が押しかけたが、この体験によって、「ガリラヤ出身の奇跡を行う御方が到着すると、ユダヤの人口稠密な諸都市がこの群衆と同じくらい多くの、しかもちゃんと服を着た人々を湧き出させたさまがどのようなものだったかが分かる (realize how the crowded cities of Judea sent forth people clothed much as these are when the Miracle-Worker from Galilee arrived)」と記している(100)。ナザレのイエスもまれびと的な性格を濃厚に帯びた「神人」である。訪れる先々で人々の熱狂を引き起こすがゆえに、まるで自分は聖なる存在のようだ、とバードは感じたのであろう。

4. 勤勉と無償の善意

ここまで取り上げたこと、特に2と3の項のそれは概ねバードを困惑させ嘆かせたことであるが、もちろん彼女の旅はそれだけに満ちていたわけはなかった。彼女は時として人々の振舞いや性向、生活態度に感じ入り、称賛すらしている。まずバードは横浜に上陸して早々に次のように記している。「上陸してすぐにまず印象づけられたのは、浮浪者が全くおらず、通りにいる小柄で醜く、優しげに見えるが皺だらけで、がに股で猫背で胸がくぼんでいて貧相な者

たちが皆、成すべき何らかの仕事がある、ということだった（The first thing that impressed me on landing was that there were no loafers, and that all the small, ugly, kindly-looking, shrivelled, bandy-legged, round-shouldered, concave-chested, poor-looking beings in the streets had some affairs of their own to mind.）（4 強調は引用者）。外見はいささか不格好かつ貧弱で見栄えがしないものの、誰もがのらくらすることもなく仕事をしていることがバードにはとても印象的であった。横浜から新橋への汽車での移動の記述においても、車窓から見える田園地帯が、「勤勉な住民たちの土地で（the country of an industrious people）、雑草ひとつ見当たらない」と形容される（12）。

旅に出発してからも、バードは民衆の勤勉さに目を凝らす。栃木県の藤原では、既述のように家々も人々の体の衣服もかなり不潔な状態だったが、バードはそこで住民たちの「辛抱強い勤勉さ（patient industry）」を目にする（85）。欧米人の目にはとても貧しく不潔で惨めなものに見えるが、住民たちにとっては勤勉さに支えられた満ち足りた農村の暮らしであることにバードは何度か言及している。例えば彼女は秋田県の白沢に滞在中に、そこの農家の夕暮れ時の光景を詳述している。

他の無数の村と同様にここでも、この日の夕暮れ時に男たちが仕事から帰宅し、食事を摂り、タバコを吸い、子供たちと楽しく過ごし、彼らを抱いて動き回り、彼らの遊びを見つめ、藁縄を繕い、草鞋を作り、竹を割り、蓑を編み、どの家でも、困ったことに私たちの国の人々が他の国の人々よりおそらくあまりやることがない、このようなささやかな金をかけない物作りや巧みな改造をして時を過ごしていた（This evening, here, as in thousands of other villages, the men came home from their work, ate their food, took their smoke, enjoyed their children, carried them about, watched their games, twisted straw ropes, made straw sandals, split bamboo, wove straw rain-coats, and spent the time universally in those little economical ingenuities and skillful adaptations which our people (the worse for them) practice perhaps less than any other.）。酒場に集まるようなことは全くなかった（There was no assembling at the sake shop.）。家々は貧しいが、男たちはそこでの暮らしを楽しんでいる（Poor though the homes are, the men enjoy them.）。（185 強調は引用者）

かように農民たちは日中の仕事を終えて帰宅したあとも、子供の世話をしながら様々な手仕事に励んでいた。さらに青森県の黒石の近隣の農村では、農民たちは骨組みに泥を手で塗りつけたような家で家禽や馬と同居する暮らしをしていたが、「飼われている犬たちや子供たちや人々の顔は全て、穏やかで満足げであり（the faces of dogs, children, and people were all placidly contented）」、「多くの良馬を所有し、彼らの作物はすばらしかった（These farmers owned many good horses, and their crops were splendid.）」（204）。欧米人の目にどう映ろうとも、農民たち自

身にとっては自分たちの勤勉さの成果を享受する満ち足りた暮らしであった。

そしてバードによれば、農民のこのような勤勉さが打ち立てたひとつの金字塔が、山形県の米沢平野という「アジアのアルカディア (Asiatic Arcadia)」であった。彼女は次のように記している。

南に米沢という繁栄する町があり、北に赤湯という多くの湯治客が訪れる温泉場のある米沢平野は、米、綿花、トウモロコシ、タバコ、麻、藍、豆、ナス、クルミ、スイカ、キュウリ、柿、杏、ザクロを豊かに産する、「鋤の代わりに鉛筆で耕されたような」完璧なエデンの園のごとき晴れやかで豊穡な土地であり、その恵み豊かな農地全てが、圧政を受けることなく、そこを耕し自分たちが育てたブドウの木やイチジクやザクロの下で暮らす人々のものであるという、繁栄し自立したアジアのアルカディアなのであり、それはアジア的専制のもとでは注目すべき光景である (The plain of Yonezawa, with the prosperous town of Yonezawa in the south, and the frequented watering-place of Akayu in the north, is a perfect garden of Eden, “tilled with a pencil instead of a plough,” growing in rich profusion rice, cotton, maize, tobacco, hemp, indigo, beans, egg-plants, walnuts, melons, cucumbers, persimmons, apricots, pomegranates; a smiling and plenteous land, an Asiatic Arcadia, prosperous and independent, all its bounteous acres belonging to those who cultivate them, who live under their vines, figs, and pomegranates, free from oppression—a remarkable spectacle under an Asiatic despotism.) (133 強調は引用者)

またバードは、米沢平野は「山々に囲まれ、澄んだ松川によって潤された美しさと勤勉さと安楽さを映し出す魅惑の地だ (an enchanting region of beauty, industry, and comfort, mountain girdled, and watered by the bright Matsuka)」と付け加える (133)。「エデンの園」やアジアの「アルカディア (理想的田園)」は最上級の称賛の表現であろう。そして彼女の目には、そのような理想郷は「アジア的専制」にも縛られることのない自立性と勤勉さの所産と映ったのである。さらにバードは数日前に立ち寄った新潟県の沼という小さな村に言及し、そこは貧しくかなりひどいありさまだったが、そこのわずかばかりの農地は米沢平野の広大な農地と同じくらいよく手入れされ耕されていて、これはどこの農村にも言えることだ、と述べたあと、次のように締めくくる。「日本には『怠け者の畑』は存在しない (“The field of the sluggard” has no existence in Japan.)」(133)。

農民をはじめとする民衆のこのようなひたむきな勤勉さは、「文明開化」の号令によって生み出されたものではなく、江戸時代から連綿と受け継がれてきた生活態度であり労働倫理であろう。司馬遼太郎は、江戸期日本にはプロテスタンティズムを思わせるような労働倫理が存在していた、と述べている (184-185)。マックス・ウェーバー (Max Weber) によれば、全て

のプロテスタント諸派の中心的教義は、「神の意にかなう唯一の生き方は、修道生活の禁欲によって世俗の道德を越えることではなく、世俗の地位によって個人に課された義務を遂行することのみであり」、それが「天職（calling）」である（80）。日本の場合は、この「神」を人の命運や道德の指標としての「天」と置き換えればいいのかもしい。渡辺京二は、江戸期の人々にとっては「働くのは天の人間に与えた使命だという感覚はたしかにあった。家業は近代という職業ではない。それは運命が与えたその人の存在形態であって、家業に精出すのは生命活動そのものにほかならなかった」のであり、「ここには、かのプロテスタンティズムの天職・召命観にかなり類似した観念の成立が認められる」と述べている（『江戸という幻景』（100）。

労働に関して、バードは興味深い記述を残している。新潟県から山形県に入ったバードは、ある峠の頂上でひどくあえぎながら休んでいる荷担ぎ人足たちを目にした。以下はその人足たちの描写である。

彼らの目は飛び出しそうだった。やせているために痛々しいほどに浮き出た彼らのあらゆる筋肉は揺れ動いていた。追い払うことのできない虫に刺されて出た血が幾筋もの小川のように文字通り裸の体全体をつたっており、おびただしい量の汗によってあちこちで洗い流されていた（Their eyes were starting out; all their muscles, rendered painfully visible by their leanness, were quivering; rills of blood from the bite of insects, which they cannot drive away, were literally running all over their naked bodies, washed away here and there by copious perspiration.）。まさに「額に汗して」彼らはパンを口にし、家族のために真面目に働いて生計を立てていた（Truly “in the sweat of their brows” they were eating bread and earning an honest living for their families!）！重労働で苦しい思いをしていたが、彼らは完全に自立していた（Suffering and hard-worked as they were, they were quite independent.）。私はこの不思議な国で乞食や物乞いを一度も見たことがない（I have not seen a beggar or beggary in this strange country.）。（126-127 強調は引用者）

この「労働する身体」はバードにとってかなり印象的なものだったようだ。その身体は、近代の工場で労働する身体とは異質のものであっただろう。ミシェル・フーコー（Michel Foucault）によれば、近代の工場は学校や兵営などと同様に、「身体の運用への綿密な取締りを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順＝効用の関係を強制する」方法である「規律・訓練」によって、絶え間ない管理と監視のもとでの合理的・効率的な生産のために「服従させられ訓練される身体を、『従順』な身体を造り出す」場となった（143）。一方で、一見悲惨なものにも見えるが、荷担ぎ人足の身体は改造・矯正された「従順な身体」ではない。この身体を駆使して働く人足たちは「額に汗して家族のために真面目に働いて生計

を立てている」のであり、「完全に自立していた」。バードは彼らの身体を、日本人の勤勉さをこの上なく印象深く体現する誇り高く美しい身体と見なしたのではあるまいか。そしてバードは、「アジアのアルカディア」とこの人足たちの「自立性」を称揚している。彼女の目には、米沢平野の農民も荷担ぎ人足も「専制」に縛られることなく自らの「天職」のために力を尽くしている、と映ったのであろう。

そしてこれも当時の庶民の労働倫理を反映するものなのだろうが、バードはわざわざ骨を折ってくれたり特別に尽力してくれたりした人物がその労をねぎらうための心付けや礼金をどうしても受け取ろうとしないということを何度も経験している。前出の福島県の坂下に着いたとき、革帯がひとつなくなっていることが分かったと、もう暗くなっていたが、馬子はそれを取りに1里も戻ってくれた。バードが感謝のしるしとして何銭か与えようとすると、馬子は、自分には旅の最後に全ての届ける責任がある、と言ってそれを受け取ろうとしなかった(102)。やはり前出の山形県の黒沢では、一休みした所で、普通はそういう所で渡す2・3銭の金を差し出すと、身につけているのが綿のズボン(「もんぺ」のことであろう)だけという姿の女性は、バードが茶ではなく水だけを飲んだから、という理由でそれを受け取ろうとしなかった。バードがその金を強引に押しつけると、彼女はそれを伊藤に返した(125)。山形県の手ノ子では、陸運会社の事務所に群衆が押しかけ、その熱気でバードが暑がっているのを見て、そこにいた女性たちが1時間ずっと団扇であおいでくれた。ここでも、彼女たちは差し出された心付けを受け取ろうとはしなかった(129)。

自分の仕事の遂行においては常に誠実・公正であろうとし、無償の親切、善意をも厭わないという姿勢も、江戸期から庶民の間で共有されてきた倫理なのではあるまいか。磯田道史は、「江戸時代、とくにその後期は、庶民の輝いた時代」であり、彼らは「親切さ、やさしさということでは、この地球上のあらゆる文明が経験したことがないほどの美しさをみせた」のであって、「倫理道徳において、一般人が、これほどまでに、端然としていた時代もめずらしい」と述べている(87)。市場経済がまだ浸透せず、マス・メディアも未発達で都会や他の地域の人々と自分たちを比べることもほとんどなかったと思われる明治前期の日本の「奥地」では、家業に勤勉に励み、必要以上のものを求めようとはせず、他人につけこんだり出し抜いたりすることを潔しとしないような素朴な風がまだ濃厚に残っていたのだろう。

5. 日本の「近代化」に対するバードの屈折した思い

ここまで見てきたバードが詳述したトピック群は、「未開人同然」の不潔不衛生であれ、人目をはばからない裸体であれ、外来者をひどく珍しがり不躰に「見物」することであれ、天から与えられた使命を果たすように自らの職分に励むことであれ、ごく自然な善意の発露であれ、いずれもいわゆる近代化の所産ではなく、当時もまだ残存した前近代の日本人のありようを映

し出すものようだ。そしてその受け止め方が嘆きであれ当惑であれ称賛であれ、それらは彼女の関心を掻き立て、心を動かし、詳述に値すると思わせるものだった。

このことに関連して興味深いのは、『日本奥地紀行』には日本の近代化、西洋化に対するネガティブな記述が散見されることだ。まずバードは、日本人の「洋装」がお気に召さなかったようだ。来日して間もない頃に早くも、「日本人は洋服を着ると、とてもちっぽけに見える (The Japanese look most diminutive in European dress.)。どの服も合っておらず、貧弱な体格やくぼんだ胸やがに股という日本人特有の欠点を強調してしまう (Each garment is a misfit, and exaggerates the miserable *physique* and the national defects of concave chests and bow legs.)」と感じている (11)。さらに、外国製家具を購入するのは悪趣味で、それは家の装飾を純粋な日本風にするという良い趣味と同じくらい目立ってしまうものだ、と述べたあと、女性皇族や政府高官の妻たちの装いに言及し、西郷^{つぐみち} (従道) の妻の和装は優美で気品ある姿で、「もし私たちの装い (洋装) だったら全くその逆に見えただろう」と記している (30-31)。久保田の師範学校を訪れたときには校長と主任教師が歓待してくれたが、二人とも洋装で、「人間というより猿のように見えた」と辛辣なコメントを付している (158)。対照的に、バードはやはり見学させてもらった久保田の病院では医師や医学生たちがあでやかな絹の袴という民族衣装 (national dress) で迎えてくれたのを嬉しく思い、このような装いは「似合わない洋装では損なわれるばかりの威厳を引き立ててくれる (assists dignity as much as the ill-fitting European costume detracts from it)」と述べている (158 強調は引用者)。

町並みについてもバードは同様の反応を示している。開港場のひとつである新潟市には近代的な病院と付属の医学校、県庁舎、裁判所、学校、兵舎、銀行などがあったが、彼女はそれらを、「敢然と前へ進もうとするという西洋風の外観をしているが、どぎつくけばけばしく味わいに欠ける (have a go-ahead Europeanised look, bold, staring, and tasteless)」と評している (115-116)。さらに彼女は西洋化した一郭を「官公庁の新潟 (the Niigata of the Government)」と呼び、それを「本物の日本風の新潟 (the genuine Japanese Niigata)」と対比して次のように述べる。

西洋の方向へ歩みを進めていることを窺わせる官公庁の新潟は、本物の日本風の新潟と比べると全く魅力のないものに見えるのであり、後者は私がこれまで見たうちで最も整然として清潔で居心地の良さそうな街で、外国人居留地の混雑とも全く無縁だ (The Niigata of the Government, with its signs of progress in a western direction, is quite unattractive-looking as compared with the genuine Japanese Niigata, which is the neatest, cleanest, and most comfortable-looking town I have yet seen, and altogether free from the jostlement of a foreign settlement.)。 (116)

バードにとって西洋化とは、大胆かつ敢然とした進歩、前進の志向というベクトルを孕み、

力強いがその一方で洗練や雅趣を欠くものようだ。それに対して「日本的なるもの」が対置される。彼女は久保田を日本の他のどの町よりも気に入っており、それはこの町が「完全に日本的 (completely Japanese)」であるからだ (160)。

かようにバードは、日本及び日本人には西洋化は合わず、その良いところを損なうものと考えていたようだ。日本が西洋化の波に侵食されていくのを快く思っていなかったのである。このような心理は、前出のチェンバレンが『日本事物誌』で吐露しているものと通じ合う。チェンバレンはこの自著を「古い日本 (Old Japan)」の「墓碑銘 (epitaph)」と形容し (5)、次のように述べている。

私たちが夢見た古き日本をつくり上げた要因が全て消滅してしまったのに、日本人の社会環境や技芸が変わらないままのはずがなかろう (Who could expect that either their social conditions or their arts should remain unaltered when all the causes which produced the Old Japan of our dreams have vanished?). 封建性も周囲から自らを閉ざした状態も消滅し、様々な信条は解体され、新しい偶像が打ち立てられ、新しく差し迫った要請が立ち現れたのだ (Feudalism has gone, isolation has gone, beliefs have been shattered, new idols have been set up, new and pressing needs have arisen.). 武士道に変わって産業主義があり、日本人の貴族的な美術の通の小さな同人サークルの代わりに、満足させなくてはならない巨大でかなり無知な外国人の大衆がいる (In the place of chivalry there is industrialism, in the place of a small class of aristocratic native connoisseurs there is a huge and highly ignorant foreign public to satisfy.). 全ての要因が変わってしまったのに、結果はこれまで通り変わらないままだと思われているのだ (All the causes have changed, and yet it is expected that the effects will remain as heretofore!) !

いや、古い日本はもう死んでいるのであり、遺体に対してなすべきことはただひとつで、埋葬することだ (No, Old Japan is dead, and the only decent thing to do with the corpse is to bury it.)。(5 強調は引用者)。

かようにチェンバレンは、明治期になってからの日本の強迫的とも言うべき近代化、西洋化への傾斜の中で「古い、昔ながらの日本が死んでしまった」と慨嘆する。

そして、彼ほどの強い筆致ではないものの、既に見たように『日本奥地紀行』においても、古い日本が失われつつあることへの哀惜の念がそこここに滲み出る。繰り返し述べてきたように、明治 11 には「ふたつの日本」が、つまり古い日本と新しい日本が混在していた。バードは新しい日本にはさして関心も好意も抱かなかったようだが、彼女が旅した「奥地」は古い日本のありようを濃厚にとどめた、言わば社会や文化の古層のような世界だった。バードにとっ

てそこは「おとぎの国」ではなかったが、西洋型の近代化という単色に塗りつぶされることを免れている「隠れ里」のようなものだったのかもしれない。

おわりに

簡略版の『日本奥地紀行』の掉尾を飾るのは、やや意外の感を与えるものだ。それは東京の郊外の火葬場見学の記述である。「およそ人がよく行くような所ではない『見もの』(“sight,” which is so far out of the beaten track)」であるがゆえに(325)、ある意味でバード好みの場所かもしれないが、なぜそれについての記述を最後にもってきたのだろうか。

バードによれば、火葬は5年前に禁止されるまで——それを西洋人の偏見への対応と考える人もいる——仏教徒の間で広く行われ、その禁止令が3年前に解かれてからは年間9千体が火葬されていた(325)。事実、1873(明治6)年に火葬禁止の太政官布告が出されたが、2年後にはそれは廃されている。火葬は日本で広く行われていた伝統的な遺体処理の葬法であった。ところでバードが訪れた火葬場では、「その仕組の簡便さは極めて注目に値し(The simplicity of the arrangement is very remarkable)」、疑いなく「遺体の無害で完全な破壊という目的にかなっており(serves the purpose of the innocuous and complete destruction of the corpse)」、さらに「安価さゆえに普通の葬儀費用が大変な負担になる階層の人々にも手の届く(its cheapness places it within the reach of the class which is most heavily burdened by ordinary funeral expenses)」ものになっていた(328)。言わばその火葬場は、遺体を合理的、効率的、経済的に処理する施設だった。バードはそこに、近代のシステムと近代以前から続いてきた習俗との合体という、明治前期の世相の一端を垣間見たのかもしれない。

イザベラ・バードの『日本奥地紀行』は、イギリス人という他者の目を通しての、近代のとは口口に立っていた日本の観察記である。彼女は外国人にとっての「未踏の奥地」を旅し、何らの公的な肩書や使命も帯びない一介の旅行者だったこともあって、名もない庶民たちの日常の暮らしや営みに直に触れ、それらを事細かに記述した。彼女は公式的な記録からは、さらに異邦人ゆえに日本人の視角からはこぼれ落ちてしまうようなものをすくい上げたとも言える。その点でもこの書は、明治前期の日本社会の貴重な史料と言えよう。なお、本論ではバードの旅の蝦夷に渡る直前までの部分を対象としたが、蝦夷の旅については稿を改めて取り上げたいと思う。

注

- 1) 『日本奥地紀行』の原著とその簡略本をめぐる事情については、原著の日本語訳書『完訳日本奥地紀行 1』(平凡社東洋文庫)の訳者、金坂清則の詳細な解題を参照した。
- 2) バードは自らを「弱弱しい健康状態にある人間 (a person in feeble health)」と形容し (20)、旅の間も時折背骨の痛みに苛まれた (100, 126)。

引用文献

- 赤坂 憲雄 『境界の発生』 砂子屋書房 1989
- 磯田 道史 『無私の日本人』 (文春文庫) 文藝春秋 2015
- 内田 樹 『昭和のエートス』 バジリコ 2008
- 大久保 利謙 『大久保利謙歴史著作集 2 明治国家の形成』 吉川弘文館 1986
- 大山 梓 『旧条約下に於ける開市開港の研究——日本に於ける外国人居留地』 鳳書房 1967
- 折口 信夫 『折口信夫全集 第一巻 古代研究 (國文學篇)』 (中公文庫) 中央公論社 1975
- 金坂 清則 「解題」 イザベラ・バード 『完訳 日本奥地紀行 1』 金坂清則訳注 (東洋文庫) 平凡社 2012 367-392
- 金田 章裕 『道と日本史』 (日経プレミアシリーズ) 日本経済新聞出版 2024
- ギメ、エミール 『明治日本散策 東京・日光』 岡村嘉子訳 (角川ソフィア文庫) KADOKAWA 2019
- 佐々 大河 『ふしぎの国のバード』 ①—⑫ KADOKAWA 2015-2024
- 司馬 遼太郎 『「明治」という国家』 日本放送出版協会 1989
- フーコー、ミシェル 『監獄の誕生——監視と処罰』 田村俣訳 新潮社 1977
- 宮崎 克己 『ジャポニスム——流行としての「日本」』 (講談社現代新書) 講談社 2018
- 宮本 常一 『イザベラ・バードの旅——『日本奥地紀行』を読む』 (講談社学術文庫) 講談社 2014
- 渡辺 京二 『逝きし世の面影』 (平凡社ライブラリー) 平凡社 2005
- 『江戸という幻景』 弦書房 2004

- Bird, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan*. 2nd ed. London: Murray, 1911. Mineola, NY: Dover, 2005.
- Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others*. 6th ed. rev., 1939. Rpt. *Complete Edition*. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1985.
- Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Trans. Talcott Parsons. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1988.